2020 年度秋学期専門演習（第 8 回）

日　時　令和 2 年 11 月 16 日（月）　10:40~12:10
場　所　関西大学高槻ミューズキャンパス M802 教室
出席者　菅原，小林，岡部，嶋津，清水，猪田，中田，大山，中塚，長井，橋爪，芳村，東森，野上

作成者：猪田

前々回の議論の補足　リスクアセスメントとリスクマネジメントについて

専門家が科学的に評価を行うのが「リスクアセスメント」であり、その結果をもとに政治家などがどのような規制を設けるのか判断するのが「リスクマネジメント」であって、これら二つの世界は分けないといけないという考え方が伝統的にとられてきた。その理由として、マネジメントの思いが強すぎると評価の内容に影響が及んだり、お墨付きのような形で科学が使われ、結論ありきの評価になったりしてしまう可能性が挙げられる。

アセスメントとマネジメントを分ける方針を明確に打ち出したものとして、米国の「レッド・ブック」がある。この報告書では、疫学的なデータなどをもとにして科学的なリスク評価を行い、その知見に基づきマネジメントを行うこと、いわば科学によるアセスメントを受けて政治によるマネジメントへ、といった直線的な流れを意識している。

しかしながら、実際にこの二つの機能を完全に分けるのは難しい局面がある。例えば福島第一原子力発電事故後、食品中に含まれる放射性物質について安全基準を策定し規制を掛けようとした事例がある。この時、アセスメントを担当していた食品安全委員会は、低線量被ばくの既存研究などを徹底的にレビューしたのだが、「科学的には分からない」という結論に至った。この結論は科学的にはたしかに妥当だが、基準を策定したいマネジメントの側からすると、具体的に参照しにくいものとなってしまった。このように、アセスメントとマネジメントを明確に分けて、前者は科学的評価で後者は政治的な意思決定を担うということを徹底しようとすると、現実には課題も多い。

「レッド・ブック」の進化版である「シルバー・ブック」本では、アセスメントとマネジメントを分けるという基本的な考え方は変わっていないが、アセスメントを行う前の段階で、どのような評価を行うのかという問題設定を行うという点が重視されている。また、二つの機能は分けるものの、両者がそれぞれ交流を持たないのではなく、コミュニケーションをとりながらリスク問題に対処していこうという流れになっている。

また Hansson and Aven 2004 の論文では、疫学的データなどの知識生産の段階では明らかに「科学」であるが、アセスメントの段階に入ると次第に「価値」の側面が強まっていき、最終的なマネジメントの意思決定段階では明確に価値判断が求められることを示している。すなわちリスクをめぐる意思決定においては、科学と政治、アセスメントとマネジメントとが、明確に分けられる部分があるとともに、両者が混じり合っている領域もあるということが、この論文からの示唆として重要である。

論文のオリジナリティ

「自分の主張」がなければ論文ではなく、その主張があったとしても合理的な仕方で根拠づけられていなければ、論文にはならない。自分の主張のオリジナリティとは、「これまで言われていなかったこと」を見つけることを指す。オリジナリティの出し方として「発見」、「発明」、「総合・関連」などの方法がある。「発見」とは新たな現象や事実の報告、「発明」とは新たな解釈や理論の提示、「総合・関連」とは、様々な事実や解釈同士を結び付け、総合することで新たな理解を提示することが該当する。

論文では自分の主張を論理的に構築することが重要であるが、そのためには、使われている言葉の意味を考えてみたり、先行研究との関係がどのようなものであるかを示したり、数値化・指標化の過程で何に焦点が当たっているのか、その裏で何が捨象されているかを考えたりすることがヒントとなる。また、別の分野と比較したり、他の国々との違いを見てみたりすることも有益である。

論文の「型」と書く上での注意点

まず問題設定・序論で、なぜその問いを扱うのか、それを問うことの意義や、その問いに対する自分の仮説がどのようなものかを述べる。次に背景・先行研究で、その問題について既にどのようなことが述べられているのか、それを踏まえて自分の研究はどのように位置づけられるのかを述べる。続いて、研究においてどのような方法・手続きをとるかを述べる。文献資料を整理したり関係者にヒアリングをしたりして得た新しい事実は、結果・論拠のところでその根拠とともに述べる。最後の解釈・考察・討論では、論拠に基づいてどのような解釈が成り立つのかを述べ、あわせて現時点での自分の研究の限界も述べる。また、研究の「社会的」意義として実際の社会的な問題への解決策への貢献を述べることが望ましいが、短期的に社会への貢献が明らかではなくとも、「知的」意義として学術的な考察の深まり（学問の「ときめき」）を述べることも重要である。

論文を書く上での留意点として、問題設定を広げすぎない、という点が挙げられる。取り組むべき問題の範囲を絞ることによって、研究で明らかにすべきことは何なのかが明確になる。しかし同時に、大きな問題意識も忘れずに持っておくことが必要である。文献を調べる際には、まずは集めた資料の目次と結論に目を通して興味深い論文にあたりをつけ、最初から最後まで読む論文を見定めてみるとよい。その際、読んだ内容や疑問をメモしておくことで、今後の研究につながりやすくなる。

今後の方針

1 月 8 日にリサーチペーパーを提出し、その後修正して 1 月 31 日に完成稿とする。今回のリサーチペーパーでは、主に問題設定・序論と背景・先行研究、研究の方法・手続きを書く。どんな問いに取り組むのか、その問いに関する先行研究にはどのようなものがあるか、自分の研究を進めることにより何を得ることができそうかを盛り込むこと。